

## 笛吹川東沢・釜の沢東俣 2004 年 8 月

酒井 利直

釜の沢の記録は ACKU のレポートの中にも 2 回登場している。釜の沢は関西でも有名な名溪なのだ。従って今回の遡行は今更レポートにする程の価値はないのだが、綺麗な写真で涼風を送ろうと思いレポートを書くことにした。合わせて中年になっても沢好きな男がいることを知ってもらえるのも悪くないかもしれない。しかし記録としては、今回は東沢の入り口で道を間違えるというチョンボがあったので釜の沢出合いまでの時間は参考にならない。釜の沢出合いから甲武信小屋までは割合気合を入れて登っているのに時間面で多少参考になるかと思う。また下山タイムは足を引きずり、引きずり下ったので参考にはならない。易しいと言われている釜の沢であるが、中年の身に 1 日千メートルの上り降りは少し応えた。しかし暑い東京の街でナメを走る沢音を思うと又行きたくなるから沢というものは不思議なものである。なお今回の同行者は、同じ会社の M 君である。

8 月 2 日 (月曜日) 快晴



私の夏休みの初日である。会社の同僚 M 君の車で西東京の自宅を午前 5 時過ぎに出発。午前 7 時半頃西沢溪谷の駐車場着。先に駐車している車は西沢溪谷散策者と思われる 1 台だけである。静かな沢登りを期待して東沢に向かう。8 時 20 分頃日東沢の川原に立つ。水量は多くなく簡単な渡渉で鶏冠谷出会へ進む。ところがここで問題が発生した。ここから山ノ神まではホラの貝のゴルジュを高巻くのだが、M 君が鶏冠尾根に登る道をしばらく迎えることを主張し、こちらもしっかり考えずついそれに乗ってしまった(その背景は後述する)。

又相当登ってから引き返したが、更に悪いことにちょっとショートカットしようとして、不要な懸垂下降をしてしまう。

そんなこんなで 2 時間以上ロスをしてしまった。実際には山ノ神に続く巻道の標識は少し東沢の川原を辿ればすぐ発見できる。正規のルートを進んでも、ホラの貝沢にかかる壊れた木の橋を通過するところでルート確認に手間取るなど今日はとにかく調子が上がらない。ただ救いは天気の良いことと水量が少ないことだ。火照った体を冷やすべく、時々態と深みを歩いたりしながら単調な川原歩きを続けた。

午後 1 時 40 分ようやく東のナメ沢出合いに到着。(写真は東のナメ沢)

午後3時20分頃釜の沢出会い到着。予定では今日は広川原に泊まる場所であるが、例のトラブルのため到底無理と判断。釜の沢出会いにタープを張る。キャンプサイトには豊富な薪が残っており、豪快な焚き火で夕食を楽しむ。東沢を吹き抜ける乾いた風が心地よい夕暮れだった。

### 8月3日(火曜日)曇り時々晴れ

5時起床。昨夜は良く晴れていて明け方に見た気温は12℃、秩父主脈からの風がタープを吹き抜けやや肌寒い一夜だった。

今日は1,000mの谷を登りそして下山しなければいけない。ルートミスは許されないと、気を締めて6時20分出発。すぐに8mの魚止滝。

滝の左側5m程のところにある斜のクラックを利用して樹林帯に入る。写真は樹林の中からエメラルド色の釜を撮ったものだ。



魚止滝の落ち口を左から右に渡ると有名な千畳のナメが現れる(左の写真)。ここまでが釜の沢の第一のハイライトだがごく簡単に通過。今日は水量が少ないので、ナメはほぼどこでも自由に歩くことができる。やがて深い淵を持った6m滝が現れる。これは左岸の明瞭な巻き道を利用。

やがて西俣・東俣の会おう両門ノ滝(下の写真)に午前7時30分に到着。普通はコースタイムなど気にせずに自分の

ペースで歩く流儀なのだが、今日は長丁場なので少し時間が気になる。参考記録では釜の沢出会いから両門ノ滝まで1時間だからまずまずである。両門ノ滝は左岸から取り付く。「初心者にはアンザイレンを考慮」とあるので20mザイルを出す。マヨイ沢を渡ると15mのヤゲンの滝がかかっている。ここは右の乾いたカンテに取り付く。しばらく連続登攀で登ると古いハーケンがあった。ここからスタカットで直上しヤゲンの滝落ち口に水平に



向かう踏み跡に出たところで後続のM君を向かえそのまま進んでもらう。

ヤゲンの滝の上の6m滝は左側を登るが、出だしがやや細かいのでアンザイレンする。ここから先は広川原と呼ばれるゴー口帯で、ピバーク適地が沢山ある。やがて単調なゴー口歩きを破る4段ナメ滝が出現。下3段は滝という程の意識もなくすたすた歩いて登るが、最上段10m滝は傾斜がある。この滝については右から登ることを指示する本もあるが、ここは左の水線ぎりぎりを登るのが簡単である。4段ナメの上到着は午前10時。ここまでが第2のハイライトだろう。ここで昼食。写真はナメ滝の上でラーメンの昼飯を作っているところだ。沢登りにはラーメンが良く合う。



中々高度を上げなかった釜の沢もここから先は連続する小滝で高度を稼ぐようになる。4段ナメの上に左からミズシ沢が入ってくる。しばらく進むと木賊沢の手前で概念図等に出ていない無名沢がまた左から合流してくる。かなり水量がある沢なので増水時等は本流と間違わない様注意が必要だろう。本流(右側)の石にわずかな赤ペンキ跡があるのも補強材料にして右側を進む。やがて木賊沢との出合。3段30mの滝と書いてある案内本もあるが、どこでどう区切るのか判然としない。スラブ状の滝が左右に分かれてどこまでも天に向かって伸びている感じだ。左が本流であるが、登り易い右の木賊沢の右側に取り付く。ここは階段状でホールドは大きいがやや高度感があるのでアンザイレンする。20m登ったところで、セルフピレーポイントを探すと古いハーケンがあった。「ハーケンをチェックするのは何年振りかなあ」などと思いながら、ハンマーでハーケンを叩くと澄んだ音が釜の沢を吹き抜ける風に乗っていった。足元に広がるナメ滝の高度感が素晴らしい。ここでピレーを取り後続のM君を迎えツルベ式にそのまま滝の落ち口までいってもらおう。傾斜のある本流のナメ滝を左にみながら疎林帯を斜め上にトラバースして本流に戻った。ここが第3のハイライト。これで核心部は終了した。疲れた体を鼓舞してポンプ小屋を求めてナメ滝というかナメ床というか区別のつかない水流をたどる。沢床はいつしか苔むし針葉樹が沢近くまで生え秩父



の風情が漂う。(左の写真)

午後0時15分ポンプ小屋到着。遡行開始から6時間が経っている。ここで沢装束を片付け、明瞭な踏み跡をたどり甲武信小屋に向かう。10分程度で小屋到着。小屋からは木賊山

をトラバースして、戸渡尾根（徳ちゃん新道）を下る。同行のM君が少し足を痛めたのでゆっくり降ったため西沢溪谷入口に到着したのは午後6時半になった。駐車場の自販機で待望のコーラ（車なのでビールは自宅までお預け）を飲み、12時間にわたる長かった沢歩きに終止符を打った。

### 主な装備等

タープ、ガスコンロ、鋸、飯盒2、8mm×20mロープ、お助け紐10m、カラビナ各自3枚程度、エイト環、ハーケン数本、シュリング数本、ラジオ（釜の沢出合いでは短波しか受信できず）

なおハーケンはビレー用に残置ハーケンを利用したのみ。

### 反省

今回の最大の反省点は、山ノ神への巻き道を地形図、遡行記録等で十分確認しておかなかったこと。併せて安易なショートカットを試みたこと。この日は全く私の中の山屋としての羅針盤が狂っていたとしか思えない。その理由をはっきりしている。先週私の勤務先の社員が子供連れで蓮華温泉に登山に出かけ行方不明になるという事故があった。（現在も見られず）

私も会社の要請を受けて3日程遭難者の捜索にあたっていたが、その絡みで前から計画していた奥只見恋ノ岐川遡行を取りやめざるをえなくなり、急遽釜の沢を代打で持ってきたのだ。釜の沢については東京から近いこともありつつい取り組みが安易になってしまった。それがルート相違の最大の原因だろう。

加えて言えば顔見知りではないといえ同じ会社の社員の山での遭難に対して「もう少し何かしてあげられることはなかったのか？」という思いが、私の山屋としての羅針盤を狂わせていたのかもしれない……………

しかし2日目の核心部の登攀については、気合を入れたせいか羅針盤が正常になり「沢が語りかけるベストルート」を瞬時に見いだす「沢感」も戻ってきた。また昨今沢登り関係の事故が多いので、慎重を期し小まめにザイルを使った。このため時間はかかったと思うが、遡行時間は別として自分としては納得の行く登り方だったと思う。

それにしても沢登りは楽しい。延々とした下山路を歩いている時は「もうしばらくはこねえぞ」などと思うのだが、下界に戻るとすぐに行きたくなるから不思議なものである。

### 沢を想う

沢は山頂の梅林に生まれた

一滴の水が海に向かう道である

沢は川柳茂る河原で生まれた

乾いた風が山に向かう道である  
沢は心の安らぎを求める山旅人に  
自然が呉れたかすかな小経である

人生には蒼天に続く大滝以外にも  
登り切らねばならない幾つかの壁がある  
人生には狭いテラスの驟雨以外にも  
耐え切らねばならない数々の風雨がある  
人生には長く単調な下山路歩き以外にも  
歩き続けなければならない boring な  
しかし大切な日々の暮らしがある

日々の暮らしの中にも満天の星を仰ぎながら  
火を囲む一時と同じ位満ち足りた時間がある  
日々の暮らしの中にも岩棚に咲く  
イワギキョウを見るのと同じ感動の一時がある

コンクリート・ジャングルを吹き抜ける風が  
一瞬私にしか聞えない沢音を運ぶ時  
沢旅のある人生は何と豊かなものか私は思う

以上